▲農colorタグ

▲ラップカーディガン 大子漆染め

▲独特な色合いが目を引く「農color」

「農color」で茨城県の地域の魅力を発信

futashiba248

商品として市場に出荷される農作物がある一方で、同じく大切に育てられても、廃棄せざるを得ない農作物もある。「愛情をもってここまで育てたのに、処分するのはもったいない」という農家の気持ちを汲み取り産まれたのが、関将史氏、裕子氏が運営するアップサイクル染色ブランドの「futashiba248」（土浦市）だ。

夫の将史氏が妻の裕子氏を両親に紹介するため、茨城県に帰郷したことがブランド設立のきっかけになった。もともと、ファッションの専門学校で出会った二人。卒業後もアパレル関連の仕事をしており、旧水海道市（現：常総市）で藍染め体験をした後に、二人はりんごの木でも染め物が出来ることを知る。さらにその数日後には、大子町へりんご狩りに訪れ、二人はりんご園で役目を終えた木は、

▲関将史・裕子夫婦

薪にするか廃棄されていることを知る。りんご狩りという隠れた大子町の一面に触れた関夫妻の中に、染色を通して茨城県の地域の魅力を広めたいという気持ちが芽生えた。帰宅後に手探りで染色に挑戦し、無事に成功。りんご園を訪れた1年後の2018年、染色として農業廃棄物をアップサイクルする「futashiba248」が誕生した。

しかし、その後の道のりは決して順調ではなかった。特に初めのうちは、農業廃棄物を集めることに苦戦。染色に利用することを説明しても怪しまれることが多く、県内の果樹園や農家へしらみつぶしに問い合わせる日々が続いた。染色素材探しに奔走する関夫妻と「futashiba248」のターニングポイントになったのが、2019年に地元のラジオ番組に出演したことだ。番組を聞いた農家を中心に二人の活動と情熱が知れ渡り、廃材を活用して欲しい農家から連絡が入るようになった。大子町のりんご園から始まった染色原料の提供元は茨城県中に広がり、今では20か所にのぼる。店舗を構える土浦市の名産品であるれんこんのひげ根も染色素材として利用。染色の報告を受けた栗の加工業者からは、農家の可能性を広げてくれてありがとうと感謝の言葉をもらった。

都内でのイベントにも出展するようになった同ブランド。商品を手に取った消費者は、二人が「農color」と名付けた染色の独特の色合いに驚きと感動の声を上げる。地域の良さをもっと知って欲しいという関夫妻の想いから、農colorタグには材料の提供を受けている市町村名が記載されている。そこには、農colorをきっかけに、実際にその地域へ足を運んでもらうという狙いもある。

現在、コンポストからお香や和紙の開発に取り組んでいる関夫妻。今秋には、まこも（潮来市の農家提供）での染色に挑戦する。大量生産・大量消費の現代において、手作業で染められ無駄なく生産されるアパレルを中心とした「futashiba248」の商材たち。これからも、農業廃棄物が生まれ変わった新たな農color商品から目が離せない。

futashiba 248
https://www.futashiba248.com/

▲栗染めの染色作業